

2015 コンピテンス調査

「グローバルに問われる能力：社会が求める大学教育をめざして」

調査報告書

2016 年 8 月

一橋大学 森有礼高等教育国際流動化センター

Executive Summary

本調査は、就職前に日本の大学卒業生に備わっていることが期待されるコンピテンスについて把握することを目的とした¹。具体的には、専門と汎用の2種類のコンピテンスの重要度と達成度の認識を多様な大学関係者の視点から調査した。調査対象は、参加3大学に属する学生、教員、卒業生、そして日本を代表する民間企業に勤務する方（以下、企業人と称す）であり、有効回答数は432人となった。調査対象分野は4分野（数学、地球科学、経済学、汎用）であり、調査実施時期は2015年12月から2016年3月である。本調査の主要な結果は以下のとおりである。

コンピテンスの重要度と達成度の認識

- (1) 卒業生は重要な専門・汎用コンピテンスほど習得しているが、その習得は十分ではないと、全対象群が考えている
- (2) 他のペアと比べて、企業人と大学関係者の間では専門コンピテンスの重要度と達成度の認識が異なっている
- (3) 教員が、卒業生にとって特に重要もしくは習得されたと考えるコンピテンスは、企業人と共通するものが多い。他方で、経済学のように、教員は英語や数学に関するコンピテンスを、企業人は実務的コンピテンスを重視する等の違いもある
- (4) 専門性・汎用性の高い能力・技能を大きく向上させる機会の程度を「ある」（とてもある、ややある）と回答する企業人は約8割を占める

コンピテンスに関連するステークホルダー間の認識

- (1) 学生は大学選択時に教育研究内容や大学の社会的評価を重視し、企業人は新入社員採用時に成果（卒業生が身に付けるべき知識や資質・能力）を重視する
- (2) 卒業生に身に付けてほしい内容として、全対象群は「物事の本質を考え抜く思考力」を重視する。もっとも、学生・教員は深い専門知識の獲得を相対的に高く評価し、企業人・卒業生は応用的な能力を重視する

¹ コンピテンス（コンピテンシー）は、特定の文脈で、複雑な要求や課題に対応できる力と定義される。これは、単なる知識やスキルではなく、心理的・社会的リソースを活用した対応を意味する（OECD, 2005, The Definition and Selection of Key Competencies, Retrieved from <https://www.oecd.org/pisa/35070367.pdf>）。

結論

本調査によって、日本の大学卒業生は、日本の大学ステークホルダーが重要と考える専門・汎用コンピテンスほど習得していると見なされる実態が明らかとなった。「コンピテンス」で測った場合に、調査参加大学の専門教育がおおむね正しい方向であることを示している。しかし本調査結果は、現在の専門教育を改善する必要も示唆している。それは、大学関係者も企業人も、卒業生は専門・汎用コンピテンスが十分身に付いていないと考えている点である。また本結果は、専門・汎用コンピテンスのうち、どのようなコンピテンスが重視もしくは習得されているのか、されていないのか、具体的に示している。これらは専門教育を担う大学教員が分野別の教育改善を図る際に活用できると考えられる。

内容

1. はじめに	1
2. 調査概要	2
2.1 調査対象者・実施方法・実施時期.....	2
2.2 調査内容	5
3. 結果	6
3.1 コンピテンスの重要度と達成度の認識.....	6
3.2 各分野で注目すべきコンピテンス.....	10
3.3 企業人と大学関係者のコンピテンス認識の違い.....	17
4. 結論と今後の課題.....	22
5. 参考資料	23
5.1 参考資料 1	23
5.2 参考資料 2 属性質問の単純集計.....	23
5.3 参考資料 3 質問紙、分野・大学別図録（別ファイルを参照のこと）	36

図表目次

図表 1	回答数（アクセス媒体・対象者別）	3
図表 2	回答数（分野・対象者別）	4
図表 3	回答数（分野・対象者・大学別）	4
図表 4	項目数（専門分野別・対象者別）	5
図表 5	重要度 vs 達成度 散布図（分野別）	7
図表 6	重要度と達成度の単回帰結果.....	8
図表 7	重要度 vs 達成度 散布図（分野・対象者別）	8
図表 8	重要度、達成度、両者差分の対象者間のピアソン相関.....	10
図表 9	基準化変量に基づいた散布図.....	11
図表 10	教員と企業人の重要度と達成度および差分の上位 5 位までのコンピテンス	13
図表 11	重要度 vs 達成度 散布図比較（分野・対象者別）	15
図表 12	仕事内容と専門分野の一致する新入社員割合	17
図表 13	企業における専門性の高い能力・技能の向上機会	17
図表 14	大学に入学する・卒業生を採用する際に重視する項目（重み付け評価） ...	18
図表 15	大学に入学する・卒業生を採用する際に重視する項目	19
図表 16	卒業生が身に付けるべきこと（重み付け評価）	20
図表 17	卒業生が身に付けるべきこと	21
参考図表 1	重要度認識と達成度認識の関係イメージ図.....	23

1. はじめに

近年、国内外の高等教育を通じて学生が身に付けるコンピテンスに注目が集まっている。日本の産業界で求められるコンピテンスを把握することは、これを考慮したカリキュラム整備を進める着実な一歩となる。また国外大学で求められるコンピテンスを参考として国際的に比較可能な大学カリキュラムを作成することは、学生の国際移動機会の増加に貢献する可能性を持つ。

このような認識の下、本調査は、日本の大学で育成することが期待されるコンピテンスの認識（どのようなコンピテンスを重要だと考え、大学教育で達成されたと考えるのか）を多様な大学関係者の視点から把握することを目的として実施された。調査の主体と実施は一橋大学である。従来から行われてきた類似調査と比較して、本調査の特徴は以下 2 点である。

- ・ 分野を超えて移転可能と考えられる汎用コンピテンスに加えて、専門分野別のコンピテンスを問う
- ・ 学生、教員、卒業生、企業人の幅広い回答者を対象とし、専門教育に責任を持つ大学教員と卒業後の学生を雇用する立場の企業人の回答間の関係に注目する

また、本調査は 2014 年度に引き続き 2 度目の実施であり、2015 年度実施調査（本調査）は前年度調査と比べ、以下の点で異なる。

- ・ オンライン調査の追加
- ・ 各コンピテンスの重要度に加えて達成度を尋ねる

本調査研究を計画・遂行するにあたっては、国内外の多くの関係者の方々に多大なご協力やご助言を賜った。学生、教員、卒業生、企業に勤務する皆さまには貴重な時間を割いてご回答いただいた。また大学の教職員の皆さまには非常にお忙しい中での参加を検討・調整していただいた。特に東京工業大学副学長（教育運営担当）である水本哲弥教授には、企業への依頼にご尽力いただいたことを心より御礼を申し上げたい。

本報告書による結果の公表や今後の活用によって、大学関係者が社会の期待を認識し、自らの教育の在り方を問い直すことで、本調査が大学教育の改善に少しでも繋がることを調査関係者一同心から願う次第である。

本報告書の構成は次のようになっている。まず第 2 章で調査概要を説明し、第 3 章で結果を要約する。第 4 章で結論と今後の課題を述べる。第 5 章は参考資料となっている。参考資料には、属性質問の単純集計、分野・大学別の詳細分析、そして質問紙が含まれる。

2. 調査概要

2.1 調査対象者・実施方法・実施時期

調査対象者

対象者：以下の方々を調査対象者とした

1. 調査参加大学に属し調査対象分野を専門とする学生（主に学部3年生以上）
2. 調査参加大学に属し調査対象分野を専門とする教員
3. 調査参加大学に属し調査対象分野を専門とした卒業生（卒後5年以内）
4. 調査参加大学の卒業生が就職していると想定される、日本を代表する民間企業に勤務し、調査対象分野を大学で専攻した方（以降、企業人と称す）（主に卒後5年以降）

対象分野：数学、地球科学、経済学、汎用（汎用のみ回答した回答者も含む）

参加大学：3大学

参加企業：

組織として調査に参加したのは40社であり、うち社名を公表可能と回答した企業は次のとおりである（50音順に記載）。

江崎グリコ株式会社、株式会社ノリタケカンパニーリミテド、株式会社マンダム、キリン株式会社、太陽ホールディングス株式会社、千代田化工建設株式会社、東燃ゼネラル石油株式会社、パナソニック株式会社、ヒューリック株式会社、三井海洋開発株式会社

実施方法

調査手法：

紙かオンライン（PC、スマートフォンなど）による回答のいずれかを参加組織が選択した。組織によっては両方を選択した場合もある。企業人は人事部などを通じて組織的に参加した場合と、個人として回答した場合の2種類がある。大学を通じて参加を呼びかけた卒業生と、組織的に参加した企業の回答者は、オンラインによる参加のみである。

使用言語：日本語と英語

調査協力の依頼：

各大学の学長及び研究科長等に対して書面にて依頼状を送付すると同時に、対象者の実質的な連絡先を把握する担当部門・部署に対して対象者への周知及び調査への参加を依頼した。大学からの回答では、学生と教員には授業やゼミで質問紙を配布・回収、もしくはオンラインでの参加を依頼するか、メーリングリストや学科ウェブページ、SNS などで案内した。卒業生には連絡先を把握する部署が URL を記載したハガキを卒業生の実家住所に送付した。

企業に対しては、2通りの依頼方法を取った。1つは日経 JAPAN1000 に分類される企業に対して、一橋大学から文書にて依頼する方法であり、2つ目は、卒業生の就職など大学として繋がりのある企業に対して、東京工業大学と一橋大学から個別に依頼する方法である²。

上記対象に対して調査を実施した結果、有効回答数は 432 人³となった。内訳を以下図表（図表 1、図表 2、図表 3）に示す。

図表 1 回答数（アクセス媒体・対象者別）

対象大学	アクセス方法	学生	教員	卒業生	企業人	合計
本報告書が対象とする大学	オンライン	33	32	39	217	321
	紙	0	0	0	111	111
	合計	33	32	39	328	432

² 日経 JAPAN1000 は、日本の国内証券取引所に上場する全銘柄から選定された 1000 銘柄を対象とし、株式市場全体の動向に連動させた運用をめざす人のベンチマークとなることを主目的に設計された指数。<https://indexes.nikkei.co.jp/nkave/index/profile?idx=nkj1000>

³ 有効回答の処理は次の通り。まず、回答を 4 つのパートに分けた（専門と汎用、重要度と達成度の組合せ）。そして 4 パートのうち、1 つでも有効と判断された場合に、有効回答者として数えた。有効の条件は、各コンピテンス認識の分散が 0 でなく（重要度認識の回答が全て同じ数字が選択されている時は無気力回答とみなした）、かつ各パートの質問数の 50% 以上に回答している場合である。よって、有効回答者であっても、その回答は欠損値を含む場合がある。

図表 2 回答数（分野・対象者別）

	学生	教員	卒業生	企業人	合計
数学	12	13	17	2	44
地球科学	9	10	11	3	33
経済学	12	9	11	96	128
合計	33	32	39	101	205
汎用	25	34	31	290	380

注：分野別コンピテンス質問に回答している場合のみ回答者とカウントした。よって、合計値は図表 1 の有効回答者数とは必ずしも一致しない。また専門を答えず汎用のみ回答した者も存在することから、専門と汎用の合計は一致しない。

図表 3 回答数（分野・対象者・大学別）

	数学				地球科学			
	学生	教員	卒業生	合計	学生	教員	卒業生	合計
大学 1	12	10	17	39	9	7	11	27
大学 2	0	0	0	0	0	0	0	0
大学 3	0	3	0	3	0	3	0	3
合計	12	13	17	42	9	10	11	30

	経済学				汎用			
	学生	教員	卒業生	合計	学生	教員	卒業生	合計
大学 1	0	0	0	0	13	16	22	51
大学 2	12	9	11	32	12	5	9	26
大学 3	0	0	0	0	0	13	0	13
合計	12	9	11	32	25	34	31	90

調査時期：

2015 年 12 月中旬～ 2016 年 3 月下旬

2.2 調査内容

本調査で使用した調査項目は、①専門コンピテンス、②汎用コンピテンス、③個人属性や大学教育および仕事キャリアに関する認識、の 3 種類で構成される。前者 2 つは、就職前に卒業生に備わっていることが期待されるコンピテンスの項目ごとに重要度と達成度の 2 種類を、高いから低いまでの 4 点尺度で尋ねた。また、最も重要もしくは達成されたと考える順に①と②のコンピテンスをそれぞれ 5 つずつ選ぶよう求めた。

本報告書で扱う 4 分野のうち、汎用コンピテンスは、昨年同様、チューニングアカデミーが欧州等の世界各地で実施した質問紙をベースとして作成した⁴。それ以外の科目（数学、地球科学、経済学）の質問紙は、日本の大学教員が新規に作成した内容である。

専門コンピテンス数は分野ごとに、個人属性や大学教育に関する認識では対象者ごとに、項目数が異なる（図表 4）。なお実際に使用した質問紙は参考資料 3 を参照されたい。

図表 4 項目数（専門分野別・対象者別）

分野	数学	地球科学	経済学	汎用
項目数	21	32	24	31

対象者	学生	教員	卒業生	企業人
項目数	13	14	13	14

⁴ チューニングアカデミーは欧州を中心とした国際的な高等教育研究センターである。世界の多地域でコンピテンス調査を実施しており、質問紙は次の URL を参照のこと。
<http://tuningacademy.org/lists-of-competences>

3. 結果

3.1 コンピテンスの重要度と達成度の認識

- (1) 卒業生は重要な専門・汎用コンピテンスほど習得しているが、その習得は十分ではないと、全対象群が考えている

コンピテンスの重要度平均値と達成度平均値の散布図を分野別に図表 5 に示す。大きく 3 点の特徴が見られる。まずは、4 つの分野において、回帰直線の傾きが右肩上がり、すなわち重要度と達成度が正の関係を示すことである。達成度を左辺に重要度を右辺に持つモデルを最小二乗法により推定した結果を図表 6 に示す。平均値を用いた分析では、全分野において重要度の係数が正かつ有意である。しかし直線の傾きを表す重要度の係数値は分野間で異なる。係数値が相対的に大きく 1 に近い分野は数学 (1.26) や地球科学 (1.15) であり、重要度よりも達成度の増加幅が大きいことが分かる。傾きが相対的に小さいのは経済学 (0.66) や汎用 (0.71) であり、重要度に比して達成度の増分が小さい分野であることを意味する。

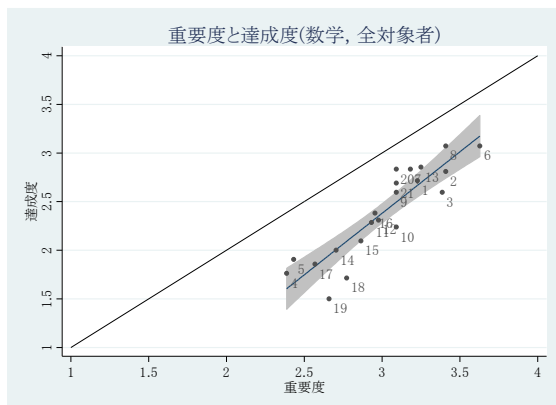
次に、分野により重要度と達成度の分布が異なることが分かる。重要度および達成度分布の幅が広いのは、数学と経済学であり、比較的狭いのは地球科学と汎用である。分布の広さは各分野のコンピテンス認識のばらつきが大きいことを意味する。よって分布の幅が広い 2 分野は、重要および習得されたと認識するコンピテンスが差別化されていることが分かる。また図表 6 からは、単回帰による決定係数の大きさ（重要度が達成度を説明する程度）が異なることも示されている。経済学と数学の当てはまりは相対的に高く（順に 0.92、0.80）、地球科学と汎用は相対的に低いことが分かる（共に 0.53）。

さらに、全分野、そしてほぼ全てのコンピテンスが 45 度線から下にあることが分かる。重要度と達成度の評価尺度が等価と仮定すると、45 度線がバランスの取れたコンピテンス習得を、45 度線から上は達成度が重要度を上回る「習得過剰」を、45 度線から下は達成度が重要度を下回る「習得不足」と認識されたコンピテンスが位置づくと考えられる（イメージ図を参考図表 1 に示す）。専門・汎用コンピテンスの重要度は同達成度よりも常に高く認識されていることから、この意味では、大学関係者も企業人も、卒業生はこれらコンピテンスが十分身に付いていないと考えていることが分かる。なお、重要度と達成度を基準化し、各分野におけるコンピテンスの位置づけに関する議論は、3.2 節で行う。

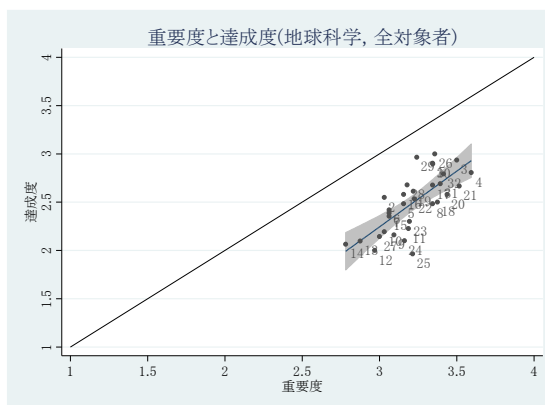
もっとも、学生が多ければ学生の認識を反映しやすいなど、結果は参加者属性に影響される。参加者の分野別構成に関しては図表 2 を参照されたい。また対象者別のコンピテンス認識に関しても 3.2 節を参照されたい。

図表 5 重要度 vs 達成度 散布図（分野別）

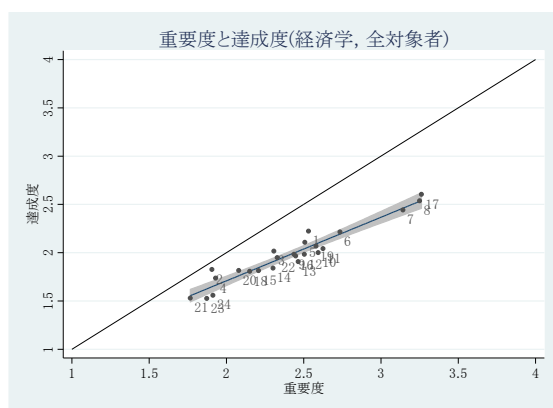
数学



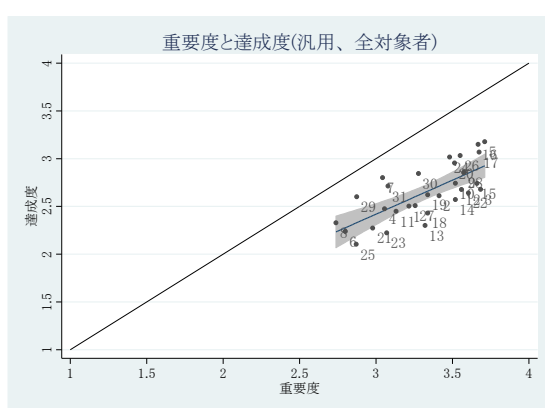
地球科学



経済学



汎用



注：図中灰色ハイライトは 95%信頼区間を表す

図表 6 重要度と達成度の単回帰結果

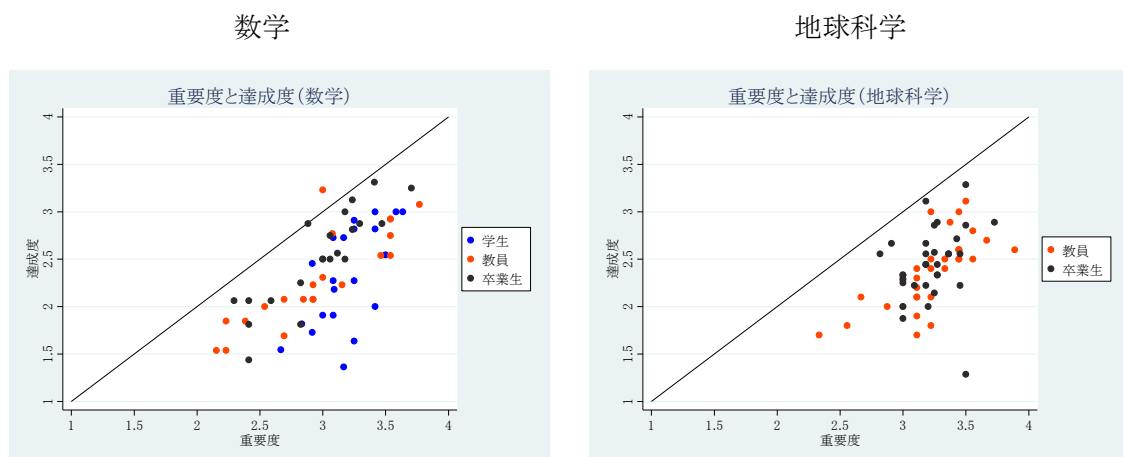
	数学	地球科学	経済学	汎用
傾き	1.2646*** (8.78)	1.1546*** (5.76)	0.6585*** (15.97)	0.7113*** (5.77)
定数項	-1.4137*** (-3.25)	-1.2193* (-1.89)	0.3921*** (3.89)	0.2857 (0.69)
観察数	21	32	24	31
決定係数	0.8024	0.5255	0.9205	0.5341

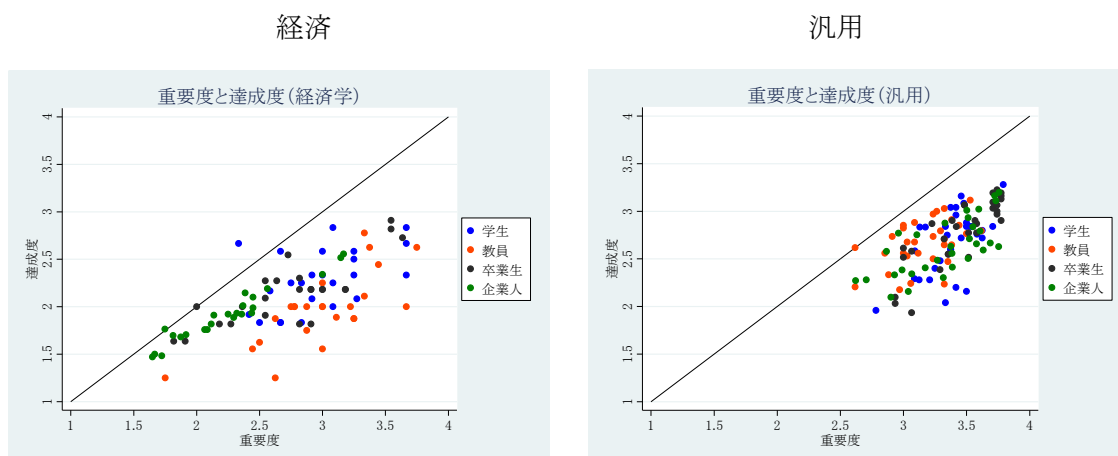
* $p < 0.10$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$ 、括弧内は t 値

(2) 教員は他の対象者よりも専門コンピテンスの達成度を低く認識する

重要度と達成度平均値の散布図を分野・対象者別に図表 7 に示す。対象者別の認識分布は、汎用コンピテンスと専門コンピテンスによって異なる。汎用では、対象群が混ざっていて群ごとの判別が難しいが、専門分野では、各対象群が他と区分できる程度にまとまっている。数学の学生、地球科学の教員、そして経済学の教員は、他の対象群と比べて 45 度線から下に位置づく。また経済学の企業人は重要度も達成度も低く評価する右下に位置づく。

図表 7 重要度 vs 達成度 散布図 (分野・対象者別)





注：各分野・対象者が 10 人以上の場合のみ図示している

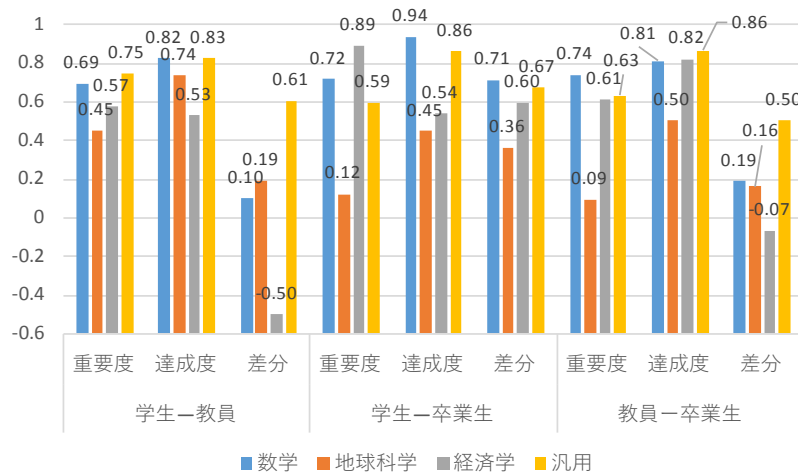
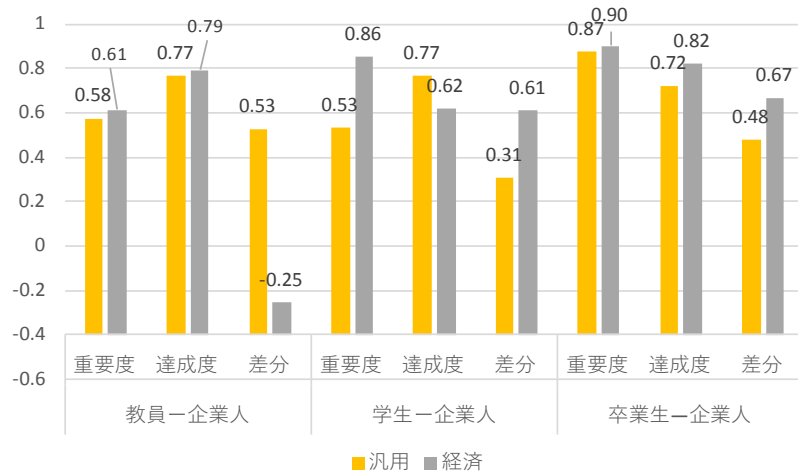
(3) 他のペアと比べて、企業人と大学関係者（教員・学生）の間では、専門コンピテン
スの重要度と達成度の認識が異なっている

重要度、達成度、および重要度と達成度の差分についての対象者ペア間のピアソン相関の結果を図表 8 に示す。重要度と達成度の差分は、各対象者の重要度から達成度を減じた値である。重要度と達成度の差分は正の関係を持つと考えられるため、差分の大きさは、重要なのに達成されていないと認識される度合を示す可能性が高い。重要度と達成度の差分の相関とは、重要度を鑑みた達成度合が対象者ペア間でどの程度同じふるまいをするか（線形な関係の強さ）を表す。同一のふるまいをする場合は 1 を、全く逆のふるまいをする場合は -1 を、関係がない場合は 0 を取る。なお平均値の議論においては、重要度が達成度を常に下回ることから（図表 5 を参照のこと）、差分には絶対値処理を施さなかった。

昨年度報告書では、企業人と大学関係者（教員・学生）ペアの相関の低さと、歴史学で相関が低いなど、分野による違いが指摘されている。うち、分野間の違いは、専門領域を仕事に活かせる程度に基づくものと推察される。これらの傾向は引き続き確認されている。図表 8 からは、ペア間の認識に違いがあること、そして分野によっても異なることが分かる。

図表 8 において、企業人とのペアは、汎用と経済学のみで比較できる。両分野では、重要度や達成度に比べて差分の相関が低い。特に経済学における教員と企業人ペアの差分は -0.25 と負の相関を示す。次に、企業人を含まないペア間の相関を見ると、やはり差分において相関が低い。学生と教員間および教員と卒業生間の相関は特に低く、汎用を例外として、数学や地球科学では 0.1 から 0.2 程度であり、経済学に至っては負の相関を示す。つまり教員のコンピテンス認識は、学生や企業人とはかなり異なることが分かる。

図表 8 重要度、達成度、両者差分の対象者間のピアソン相関



3.2 各分野で注目すべきコンピテンス

(1) 重要度と達成度の基準化変量に基づくコンピテンスの位置づけ

ここでは、45 度線を超えるコンピテンスや、ほぼ直線上に位置づくコンピテンスはどのようなものか、コンピテンスを基準化することによる把握を試みる。分野内のコンピテンスの位置づけは図表 5 と同じだが、各コンピテンスの相対的位置づけが明確になる。

まず数学を見ると、重要度が正のコンピテンスは比較的 45 度線に近いことが分かる。重要度が高いコンピテンスのうち相対的に 45 度線から離れているのは、45 度線の上部分に位置づく「8. 一般的な数学的アプローチの活用」「3. 数学以外にも専門領域を広げる」であり、重要度が低いながらも正かつ 45 度線の上部分に相対的に離れて位置づくのは「20. 専門的情報の入手」、下部分に離れて位置づくのは「10. 数学専門知識の現実世界への活用」であ

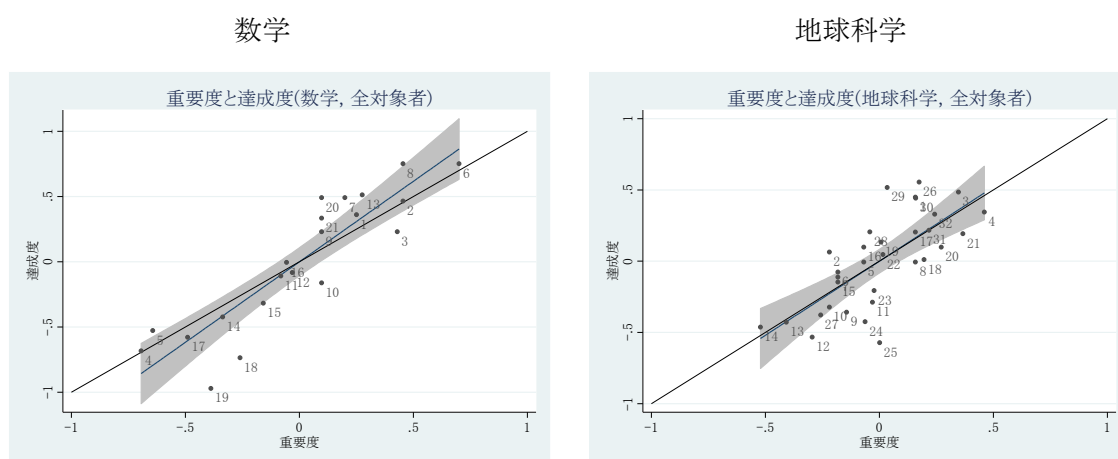
る。重要度も達成度も負であり 45 度線から離れた下部分に位置づく、すなわち重要ではないが未習得と考えられているコンピテンスは「18. 数学分野以外の研究者と協働」「19. 母語以外の言語での専門的な議論の実施」である。

次に地球科学を見ると、重要度が正のコンピテンスのうち相対的に 45 度線から離れているのは、45 度線の上に位置づく「26. 専門的情報の入手」「29. 規則や倫理指針の理解」であり、重要度が低いながらも正かつ 45 度線から相対的に下に離れて位置づくのは「25. 地球科学の話題についての母語以外の言語での議論」である。

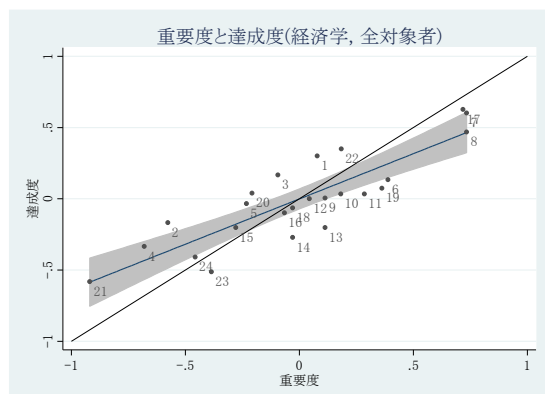
経済学を見ると、回帰線の傾きが 1 より小さいことから、重要なコンピテンスほど 45 度線の下に位置づき、習得されていないと見なされていることが分かる。非常に重要と見なされている Q7,Q8,Q17 の 3 つのコンピテンスのうち 45 度線から相対的に離れているのは「8. 統計データの収集と加工」である。これら 3 つのコンピテンスから少し離れた位置にあり重要度が正のコンピテンスのうち、45 度線から相対的に離れているのは、上部分に位置づく「1. 経済モデルの数式やグラフを用いた説明」、下部分にある「19. 英字新聞や英文雑誌の経済記事の正確な読解」である。

汎用を見ると、重要度が高く 45 度線から下に相対的に離れて位置づくのは「3. 計画立てと時間管理」であり、重要度はほぼ 0 ながら 45 度線から下に最も離れて位置づくのは「13. 新しい考え方を生み出す」である。逆に重要度が負で 45 度線から上に相対的に離れて位置づくのは「7. 情報通信技術の活用」「29. 環境保護への深い関与」である。

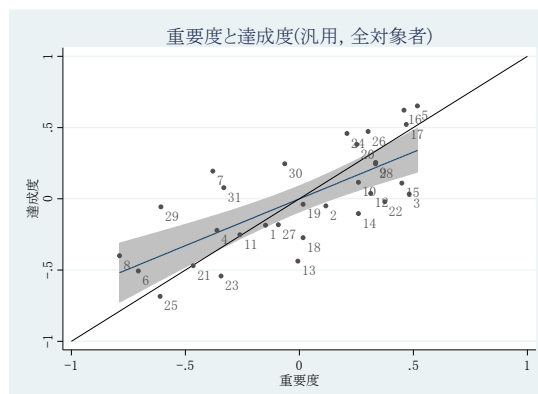
図表 9 基準化変量に基づいた散布図



経済学



汎用



(2) 各分野で高く認識されているコンピテンス

各分野で注目すべきコンピテンスとして、達成度、重要度、重要度と達成度の差分の各上位5位までの項目を、教員と企業人を対象として図表10に示す。

【経済学】

教員と企業人の経済学におけるコンピテンス認識は、上位5位までのうち、重要度で2項目(Q6,Q7)、達成度では3項目(Q7,Q8,Q17)が共通するが、差分で共通する項目はない。ちなみに、達成度で共通する3項目「7.経済統計の理解と読み取り」「8.統計データの収集と加工」「17.新聞・雑誌等の経済記事を批判的に議論する」は、企業人の3指標全てに含まれることから、これらは重要かつ一定程度は習得されているが、重要度に比して習得が不十分と認識されていることがわかる。

教員と企業人の違いは、差分に現れている。教員は英語(Q19, Q20, Q23)や数学(Q2)に関連する4項目を含むのに対して、企業人はQ7,Q8,Q17を含むなど、一般実務的な内容を重視する点である。

【汎用】

汎用分野では、重要度では2つのコンピテンス(「5. 母語での意思疎通」と「15.理論的な意思決定」)が共通する。共通しない項目のうち、教員は知識にかかわるコンピテンス(Q2, Q9)が含まれ、企業人には対人関係にかかわるコンピテンス(Q16, Q17)が含まれる点が、特徴的である。達成度は3つ(Q5,Q16,Q17)のコンピテンスが共通する。差分では2つのコンピテンス(「13.新しい考え方を生み出す」「14.問題を特定し解決」)が共通する。教員と企業人の差分において、共通しない3項目のうち、教員は「最新の学術知識」(Q9)や「国際的活動」(Q6, Q21)に関連するものを挙げ、企業人は「時間管理」(Q3)や「自律的な仕事」(Q22)など自律的な業務遂行に関連するものを挙げる。

図表 10 教員と企業人の重要度と達成度および差分の上位 5 位までのコンピテンス

【経済学】

教員

順位	コンピテンス	重要度	コンピテンス	達成度	コンピテンス	差分
1	22.日本語での論文執筆能力	3.75	8.統計データの収集と加工	2.78	6.専門外の人に経済理論を説明	1.67
2	6.専門外の人に経済理論を説明	3.67	17.新聞・雑誌等の経済記事を批判的に議論する	2.63	2.数学的解法の理解	1.44
3	7.経済統計の理解と読み取り	3.44	22.日本語での論文執筆能力	2.63	19.英字新聞や英文雑誌の経済記事の正確な読解	1.38
4	17.新聞・雑誌等の経済記事を批判的に議論する	3.38	7.経済統計の理解と読み取り	2.44	20.英語文献の正確な読解	1.38
5	1.経済モデルの数式やグラフを用いた説明	3.33	16.法制度の理解に基づいた経済政策の議論	2.25	23.英語での論文執筆能力	1.38

企業人

順位	コンピテンス	重要度	コンピテンス	達成度	コンピテンス	差分
1	17.新聞・雑誌等の経済記事を批判的に議論する	3.17	17.新聞・雑誌等の経済記事を批判的に議論する	2.56	7.経済統計の理解と読み取り	0.66
2	8.統計データの収集と加工	3.15	8.統計データの収集と加工	2.52	8.統計データの収集と加工	0.63
3	7.経済統計の理解と読み取り	3.00	7.経済統計の理解と読み取り	2.34	17.新聞・雑誌等の経済記事を批判的に議論する	0.61
4	6.専門外の人に経済理論を説明	2.56	6.専門外の人に経済理論を説明	2.19	10.財政的諸課題の理解と議論	0.50
5	5.経済学の基礎概念に関する思想的背景の理解	2.45	1.経済モデルの数式やグラフを用いた説明	2.15	11.金融・資本市場の理解と議論	0.46

【汎用】

教員

順位	コンピテンス	重要度	コンピテンス	達成度	コンピテンス	差分
1	9.最新の学術知識を取り入れる	3.62	5.母語での意思疎通	3.12	13.新しい考え方を生み出す	1.09
2	5.母語での意思疎通	3.53	28.自身の職責の遂行	3.03	14.問題を特定し解決	0.88
3	22.自律的に仕事をする	3.50	26.倫理的思考に基づいた行動	3.00	9.最新の学術知識を取り入れる	0.82
4	15.理論的な意思決定	3.44	17.対人関係スキル	2.97	21.国際的な仕事	0.82
5	2.知識を実践に応用	3.38	20.多様性の尊重	2.91	6.第二言語での意思疎通	0.79

企業人

順位	コンピテンス	重要度	コンピテンス	達成度	コンピテンス	差分
1	16.チームでの作業	3.76	16.チームでの作業	3.20	3.計画立てと時間管理	1.13
2	3.計画立てと時間管理	3.75	5.母語での意思疎通	3.16	22.自律的に仕事をする	1.04
3	17.対人関係スキル	3.73	17.対人関係スキル	3.11	15.理論的な意思決定	1.02
4	5.母語での意思疎通	3.72	26.倫理的思考に基づいた行動	3.02	13.新しい考え方を生み出す	1.01
5	15.理論的な意思決定	3.69	24.安全性へのこだわり	3.01	14.問題を特定し解決	1.01

(3) 対象者別の専門コンピテンス重要度・重要度

ここでは、各対象者群が認識するコンピテンスの位置づけと内容を、散布図から概観する。各対象者群が一定規模確保できる数学と経済および汎用の3分野を対象とし、これら2分野の重要度と達成度の平均値による散布図を対象者別に図表11に示す。

まず数学の結果を見ると、教員と卒業生が似た分布形状を示すのに対して、学生はより重要度を高く評価し、回帰直線の傾きも急であることが分かる。学生のコンピテンス分布を卒業生と比べると45度線から遠い、すなわち習得不十分と認識していることも分かる。個別コンピテンスに関しては、教員のみが、他のコンピテンスから外れた形で「21.柔軟な職業選択に向けた準備」を45度線より上に位置づける。また「18.数学分野以外の研究者と協働」「19.母語以外の言語での専門的な議論の実施」は3群ともに45度線より下部の離れた位置で認識するが、学生のみが「10.数学専門知識の現実世界への活用」も同様に離れた位置で認識する。

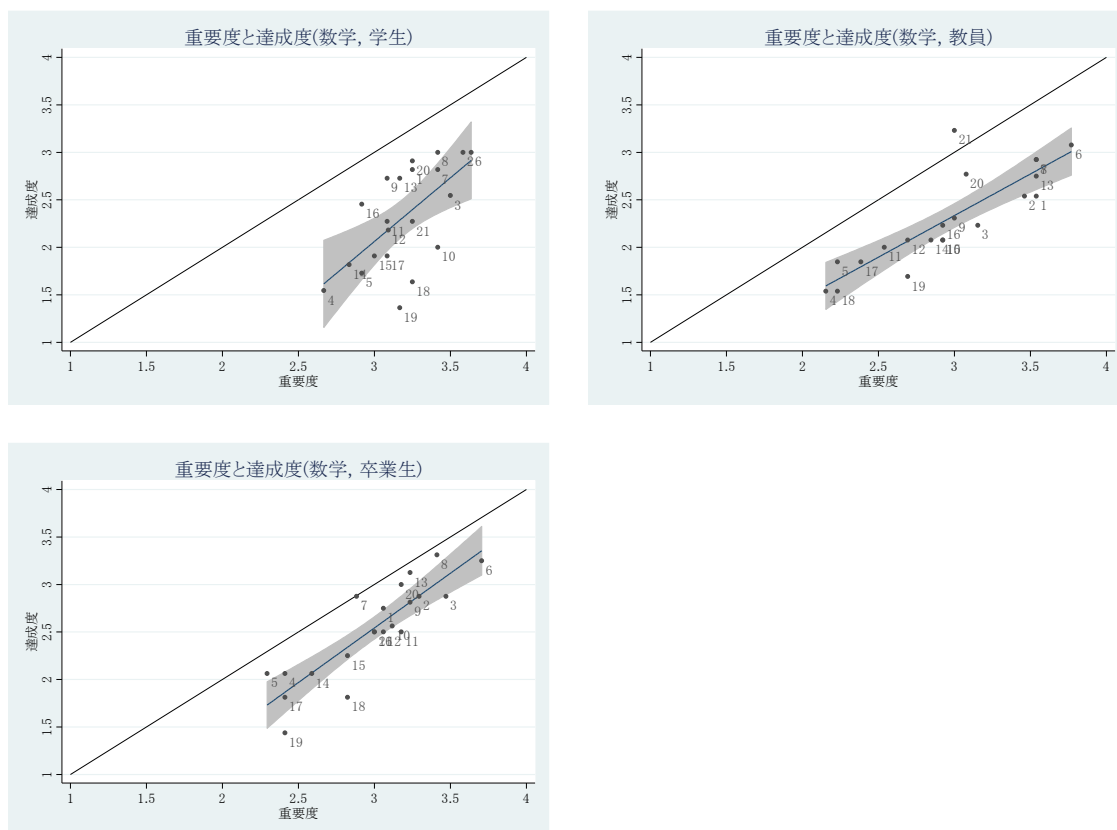
経済の結果を見ると、企業人の信頼性区間が狭いなど、対象者種別により回帰直線の当てはまりが違ってくる。しかし対象群にかかわらず、ほぼすべてのコンピテンスが45度線下に位置づく。例外としては、例えば学生が45度線を超えて位置づける「2. 数学的解法の理解」がある。これは、対象群により重要度が異なるコンピテンスである。すなわち、学生、卒業生、企業人の3対象群の重要度は極めて低く、教員は中程度の認識である。卒業生は、「4. 経済学の古典を参照した議論の実施」を、45度線上で認識している。重要度が最も低い群に位置づくが、適切な習得と認識されていることが分かる。前述のように、教員と企業人はQ7, Q8, Q17の3コンピテンスを高く評価したが、これら傾向は学生や卒業生でも同様である。

汎用コンピテンスは、全ての対象群が、重要度の下限を2.5から3の間で、上限を3.5から4の間と狭い幅で認識している。学生と卒業生に比べて、教員と企業人の傾きが小さい。ほぼ全てのコンピテンスが45度線の下部分に位置付く。例外は、教員が、45度線上に位置付ける「29. 環境保護への深い関与」である。

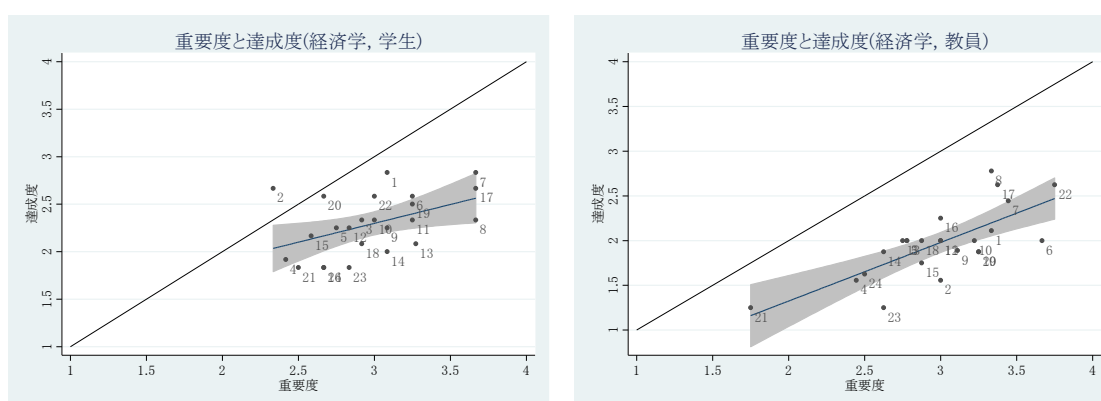
学生は3つのコンピテンスを45度線から下部分に相対的に離れた位置で認識している。これらは、「6. 第二言語での意思疎通」「13. 新しい考え方を生み出す」「21. 国際的な仕事」である。これら3つを離れた位置で認識するのは、教員や卒業生でも共通である。他方で、企業人はQ13を45度線から比較的離れた位置で認識するが、「国際」に関係するQ6やQ21を他のコンピテンスと同程度に位置づける。すなわち「国際」関係の能力は大学関係者の方が習得を厳しく捉えていると考えられる。

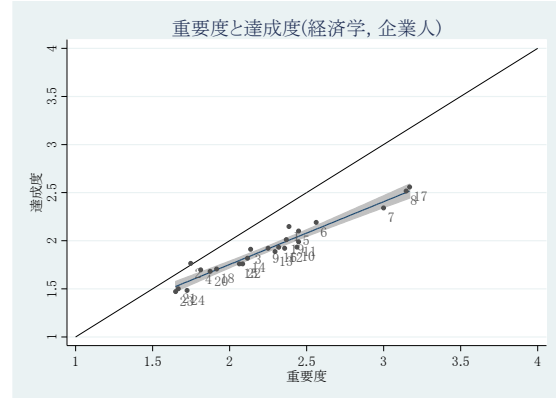
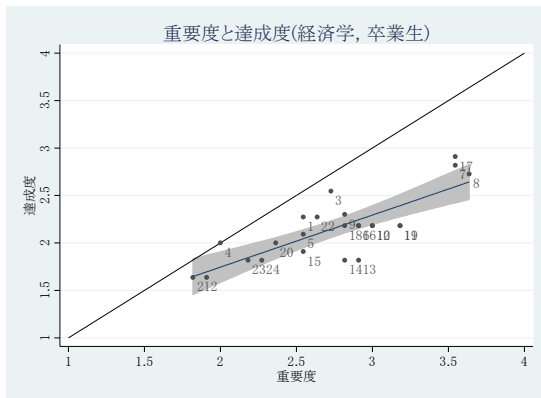
図表 11 重要度 vs 達成度 散布図比較 (分野・対象者別)

【数学】

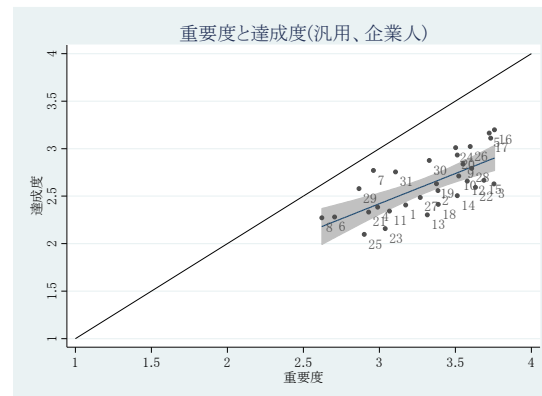
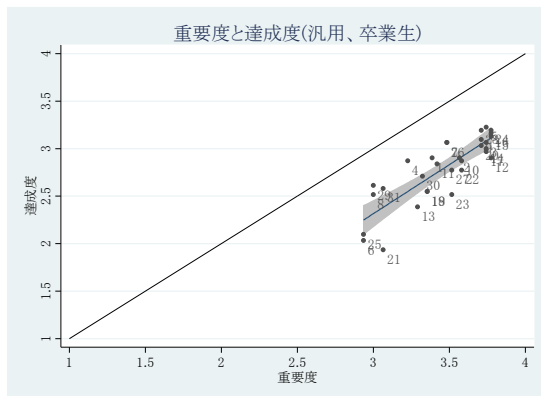
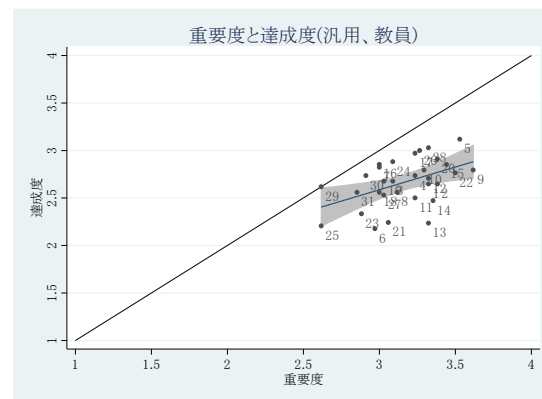
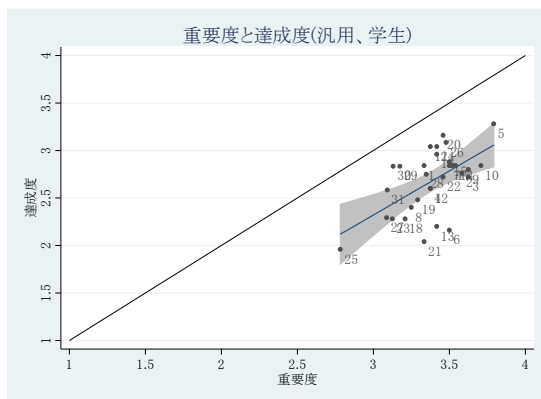


【経済学】





【汎用】



3.3 企業人と大学関係者のコンピテンス認識の違い

(1) 新入社員の6割以上は、仕事内容と専門分野がほぼ一致しないと見なされている

新入社員の6割以上は、仕事内容と専門分野がほぼ一致しないと見なされている。具体的には、仕事内容と専門分野がほぼ一致する新入社員の割合を過半数（6割以上）とみなす企業人は15%に満たず、逆に半数を下回る（4割以下）と見なす企業人は63%を占める（図表12）。

図表12 仕事内容と専門分野の一致する新入社員割合

仕事内容と専門分野の一致する新入社員割合	人数	割合
8割以上	14	5.0%
6割以上8割未満	26	9.3%
4割以上6割未満	63	22.6%
2割以上4割未満	71	25.4%
2割未満	105	37.6%
合計	279	100.0%

(2) 汎用性・専門性の高い能力・技能を大きく向上させる機会の程度を「ある」（とてもある、ややある）と回答する企業人は約8割を占める

企業人に対して汎用性および専門性の高い能力・技能を大きく向上させる機会の程度を尋ねたところ、「ある」（「とてもある」「ややある」）と回答した割合は、約8割を占める（専門性（76.6%）、汎用性（85.9%））（図表13）。

図表13 企業における専門性の高い能力・技能の向上機会

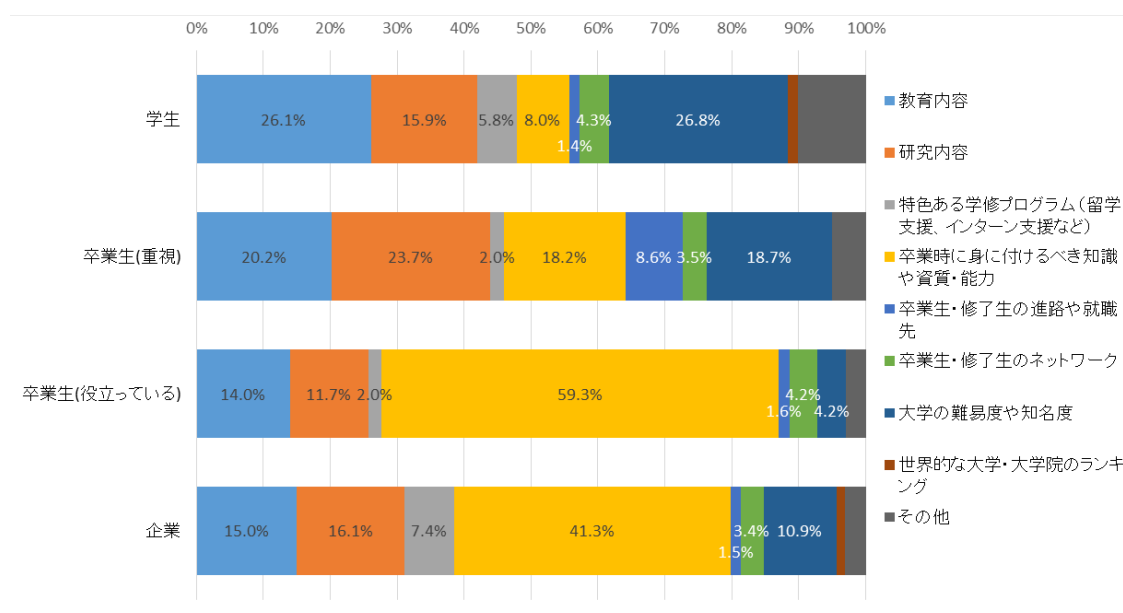
	専門性の高い能力・ 技能の向上機会 人数	割合	汎用性の高い能力・ 技能の向上機会 人数	割合
とてもある	97	34.4%	118	41.7%
ややある	119	42.2%	125	44.2%
どちらとも言えない	41	14.5%	27	9.5%
あまりない	24	8.5%	11	3.9%
全くない	1	0.4%	2	0.7%
合計	282	100.0%	283	100.0%

(3) 学生は大学選択時に教育研究内容や大学の社会的評価を重視し、企業人は新入社員採用時に成果（卒業生が身に付けるべき知識や資質・能力）を重視する

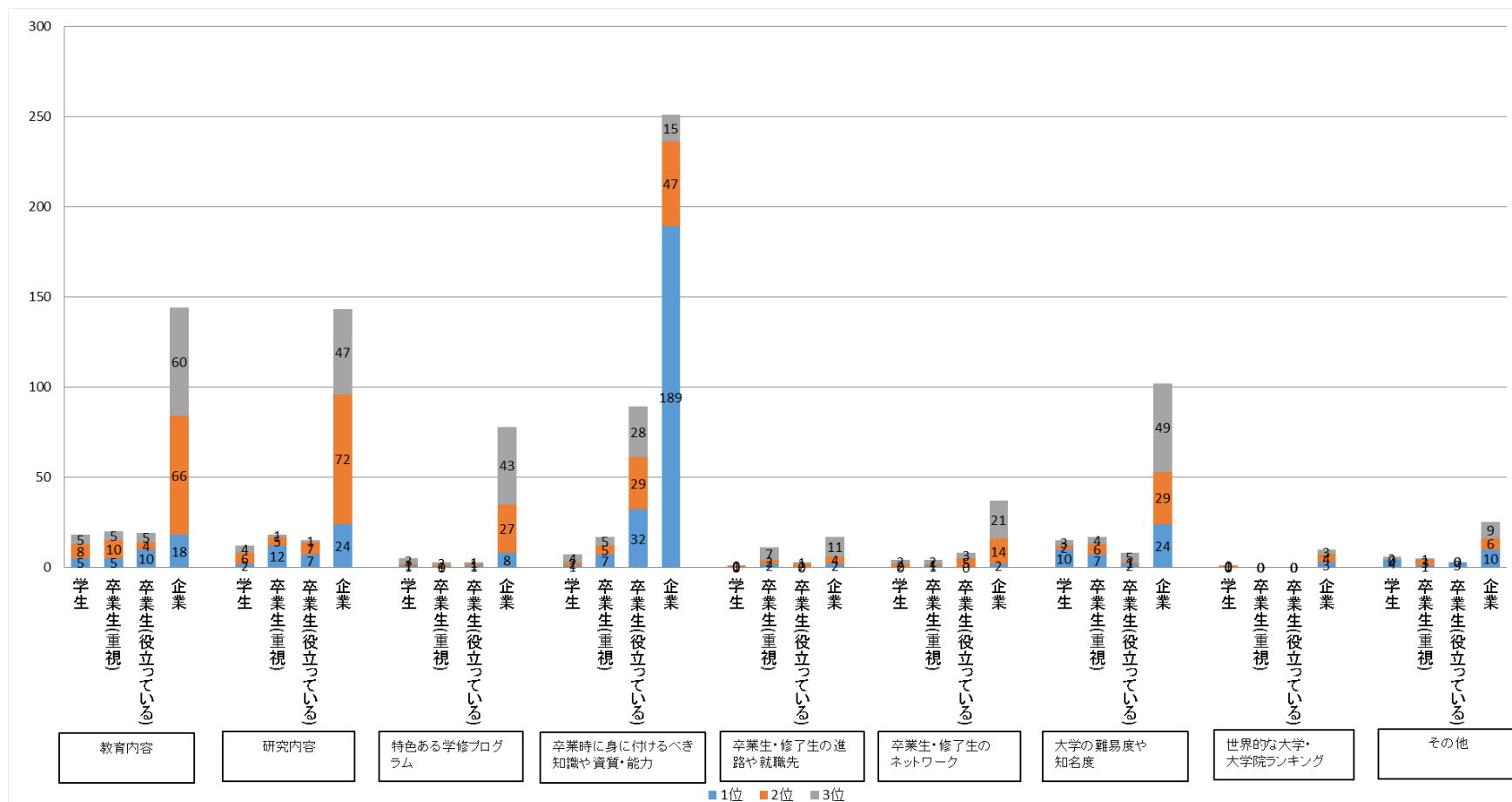
学生・卒業生には大学に入学した際に重視した項目を選択肢の中から 1, 2, 3 位まで選ぶよう、うち卒業生には、併せて仕事の際に役立っている項目も選ぶよう求めた。そして企業人には学生を採用する際に重視する項目を選ぶよう求めた。この結果を図表 15 に、対象者間の比較を容易にするために、1 位を 3 点、2 位を 2 点、3 位を 1 点として重み付けして集計した結果を図表 14 に示す。

図表 14 では、学生と卒業生（入学に際して重視した項目）が同じような傾向を示す。まず、学生や卒業生の大学入学では、「大学の難易度や知名度」（学生 26.8%、卒業生 18.7%）、および「教育内容・研究内容」を重視している（教育内容・研究内容の両方を合せて学生と卒業生共に約 40%程度）。これに、「卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力」が続く。卒業生（仕事に役立っている）の回答内容は、企業人の内容に近い。企業人は、「卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力」が 4 割を超え、卒業生は 6 割に達する。これら結果からは、学生・卒業生は大学選択時に大学の社会的評価や教育サービスとしてのプロセスを重視し、企業人は卒業生が身に付けるべき知識や資質・能力、すなわち教育成果を重視すると考えられる。

図表 14 大学に入学する・卒業生を採用する際に重視する項目（重み付け評価）



図表 15 大学に入学する・卒業生を採用する際に重視する項目

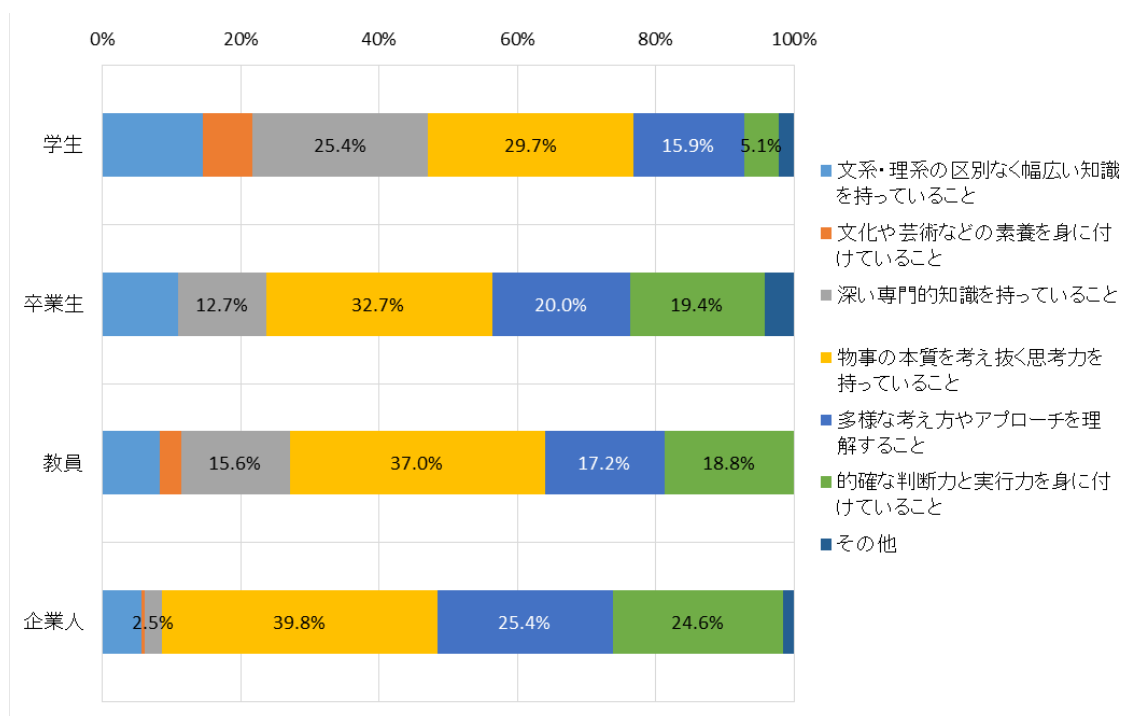


- (4) 卒業生に身に付けてほしい内容として、全対象群は「物事の本質を考え抜く思考力」を重視する。もっとも、学生・教員は深い専門知識の獲得を比較的高く評価するが、企業人はより応用的な能力を重視する

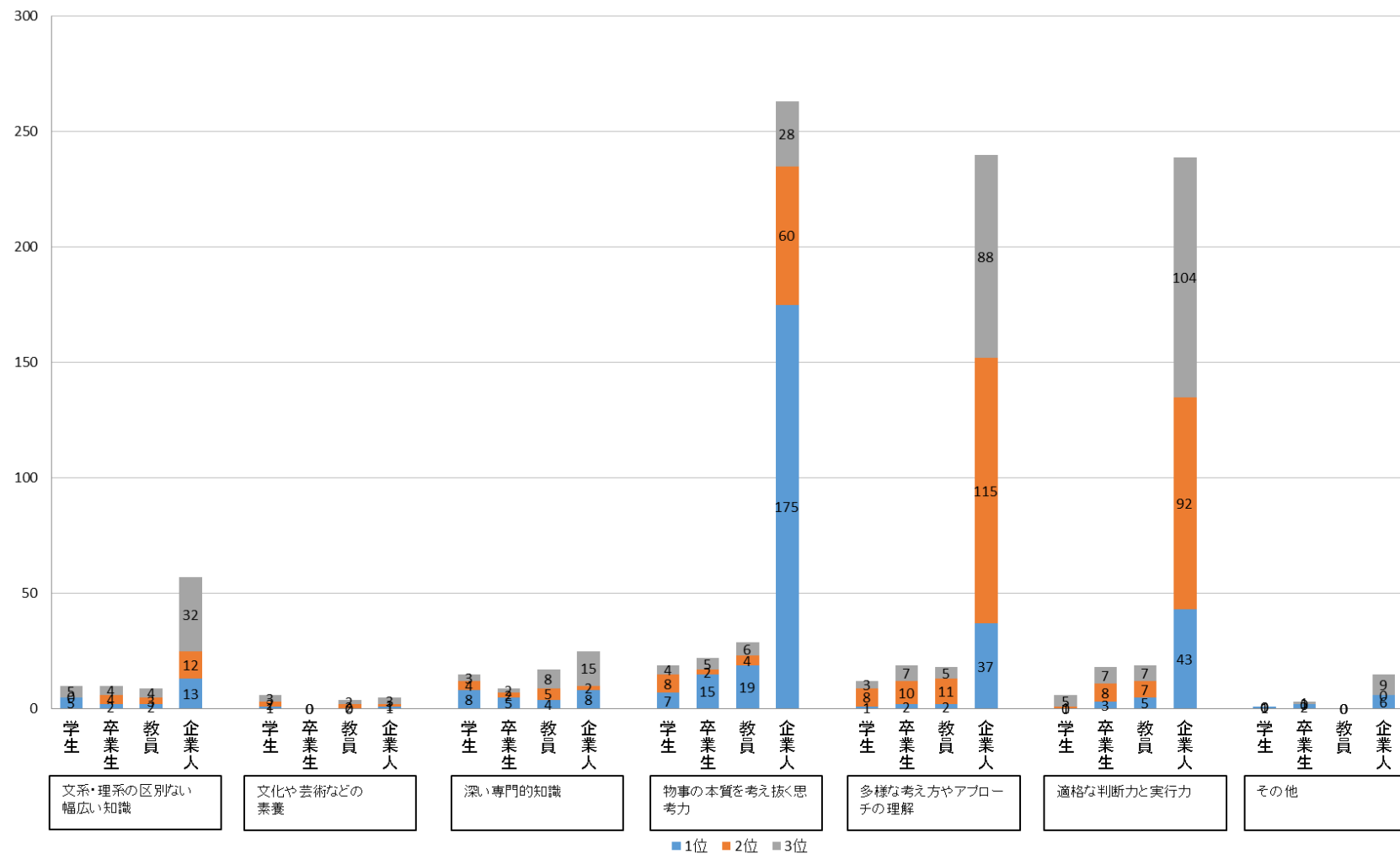
卒業生が身に付けてほしい内容の6つの選択肢を提示し、全対象群（学生、教員、卒業生、企業人）に対して1, 2, 3位まで選ぶよう求めた。この結果を図表17に、対象者間の比較を容易にするために、1位を3点、2位を2点、3位を1点として重み付けして集計した結果を図表16に示す。図表16では、全4種の対象者は同様に「物事の本質を考え抜く思考力」をトップに選んでいることが示されている。しかし、その割合は企業人が約4割（39.8%）であるのに対して、学生は約3割（29.7%）と若干異なる。対象者間の違いは、「深い専門知識を持つこと」に現れている。大学関係者は「深い専門知識」を比較的多く選択しているのに対して（学生25.4%、教員15.6%、卒業生12.7%）、企業人が選ぶ割合は小さい（企業人2.5%）。また、学生と比較して社会人（教員、卒業生、企業人）は、「的確な判断力や実行力」を高く評価する（学生5.1%、教員と卒業生は各約20%、企業人24.6%）。

学生は専門知識の習得過程にあり、教員は専門知識の授与を本業とするため深い専門知識の保有を重視する一方、専門知識以外も求められるキャリアを積み上げる卒業生や企業人はより応用的な能力を重視すると考えられる。

図表 16 卒業生が身に付けるべきこと（重み付け評価）



図表 17 卒業生が身に付けるべきこと



4. 結論と今後の課題

本調査は、就職を前に、日本の大学卒業生に備わっていることが期待されるコンピテンスについて、多様な大学関係者の視点から把握することを目的とした。本調査結果からは、専門領域で重要であると見なされるコンピテンスほど卒業生の身に付いていることが明らかとなった。「コンピテンス」で測った場合に、経済やビジネスの専門教育の内容や教授手法等がおおむね正しい方向であることを示している。しかし調査結果は、同時に、現在の専門教育を改善する必要も示唆している。まず、大学関係者も企業人も、学生・卒業生は専門コンピテンが十分身に付いていないとおしなべて考えている点である。

本調査結果は、専門コンピテンスのうち、どのようなコンピテンスが重視・達成されているのか、されていないのかを、具体的に示している。これらは専門教育を担う大学教員が分野別の教育改善を図る際に参考となる。また調査結果は、企業において、汎用コンピテンスと専門コンピテンスの両方を大きく向上させる機会があるとの結果を示している。これまで特に汎用コンピテンスを高等教育で身に付けさせることを促す議論の背景には、日本企業の社内教育の減少が指摘されてきた。機会の捉え方にも依るが、コンピテンスを高める機会は継続的に得られると企業人は認識していることが分かった。このような前提は、大学教育を通じて何を与えうるのか検討する際の示唆を与える。

本調査結果は、個別具体的コンピテンス間の認識分析に加えて、コンピテンス認識そのものの関係者間の違いを示した。この結果、学生・卒業生は大学選択時に大学の社会的評価や教育プロセスをより重視し、企業人は教育成果としてのコンピテンスを重視する結果が示された。また卒業生に身に付けてほしい内容として、全4種の対象者は同様に「物事の本質を考え抜く思考力」を最も多く選ぶが、学生・教員は「深い専門知識の保有」を高く評価する一方、企業人・卒業生は「高次・応用的な能力」を重視するとの結果が示された。このような認識の差を踏まえた教育改善が提案される。

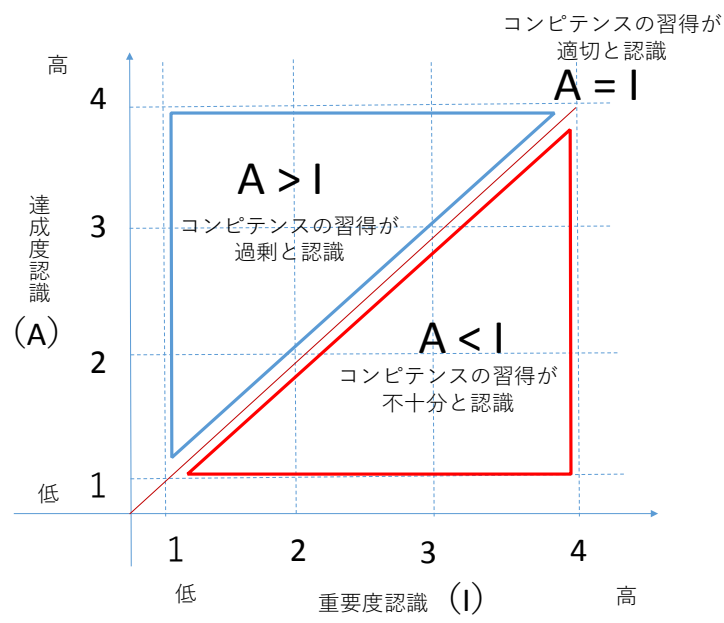
本調査は、上記で述べたように一定の結果を示したが、改善すべき点もある。アンケートの自由記述には、質問の多さ、想定の絞りにくさ、コンピテンス内容への意見など、複数の意見が記述されていた。これらは真摯に受け止め改善につなげる必要がある。また統計分析に耐える調査参加者数の確保の必要も指摘される。さらには調査結果の活用である。調査結果が報告書としての発表のみに終始するのではなく、教育改善を検討する際の基礎情報を提供することが調査実施関係者の課題である。

今後のテーマとしては、2点挙げられる。本報告書で扱った調査参加大学は4大学だった。専門教育を踏まえて日本の大学教育の在り方を議論するには、分野を絞るなどして、より多数の大学に参加頂く必要がある。また今後は、コンピテンスの認識と同時に、実際身に付いているコンピテンスそのものを測る試みも求められるだろう。

5. 参考資料

5.1 参考資料 1

参考図表 1 重要度と達成度の関係イメージ図



5.2 参考資料 2 属性質問の単純集計

(1) 基本属性

性別

性別	学生	教員	卒業生	企業
男	19	28	24	226
女	5	6	5	61
合計	24	34	29	287

年齢

年齢	学生	教員	卒業生	企業
19～23歳	15	0	4	7
24～28歳	6	2	13	67
29～33歳	2	2	6	42
34～38歳	0	5	0	38
39～43歳	1	7	2	36
44～48歳	0	3	1	34
49～53歳	0	7	1	30
54～58歳	0	4	1	24
59～63歳	0	4	0	3
64歳以上	0	0	1	1
合計	24	34	29	282

卒後年数

卒後年数	卒業生	企業
1～5年	19	50
6～10年	7	41
11～15年	0	33
16～20年	0	33
21～25年	0	31
26～30年	0	33
31～35年	0	23
36～40年	0	6
41～45年	0	2
合計	26	252

(2) 大学関連

【課程・学歴】

課程

課程	人数
学士3年	7
学士4年	6
修士1年	2
修士2年	4
博士1年	1
博士2年	2
博士3年	2
合計	24

最終学歴

最終学歴	卒業生	企業
学士	17	117
修士	9	55
博士	3	5
合計	29	177

【教員】

学生として複数大学の在学経験

複数大学在学(教員)	人数
ある	11
ない	22
合計	33

教員職階

教員職階	人数
教授	11
准教授	13
講師	1
助教	5
その他	2
合計	32

複数の大学での勤務経験

教員として複数大学勤務	人数
ある	12
ない	21
合計	33

大学以外での勤務経験

大学以外での勤務経験	人数
ある	7
ない	26
合計	33

授業担当年数

授業担当年数	人数
0～4年	7
5～9年	6
10～14年	4
15～19年	1
20～24年	9
25～29年	2
30～34年	1
35～39年	3
合計	33

【国際経験】

海外大学での単位取得経験

海外大学での単位取得経験	学生	教員	卒業生	企業
ある	2	1	3	15
ない	21	32	26	268
合計	23	33	29	283

海外大学での単位取得経験がない学生のうち正規留学希望

正規留学希望	人数
あり	7
なし	14
合計	21

【進路】

学生の教員免許有無

	教員免許有無(希望を含む)
はい	9
いいえ	14
合計	23

就職希望先、就職先

就職希望先、就職先	学生	卒業生
民間企業	10	15
大学等の教育・研究機関	9	3
小学校・中学校等の学校	2	7
官公庁	1	1
公益法人	1	0
自営業	0	0
その他	0	3
合計	23	29

就職希望先、就職先（学生・卒業生）

就職希望先、就職先	数学	地球科学	経済学
民間企業	8	6	11
大学等の教育・研究機関	3	3	6
小学校・中学校等の学校	8	0	1
官公庁	1	1	0
公益法人	0	1	0
その他	2	1	0
合計	22	12	18

就職希望先、就職先の業種

就職希望先、就職先の業種	学生	卒業生
製造業	2	2
卸売業	0	0
金融・保険業	1	3
不動産業	0	0
学術研究	11	2
専門・技術サービス業	2	5
教育学習支援業	2	5
医療・福祉業	1	0
サービス業	1	1
公務	2	5
その他	0	6
合計	22	29

就職希望先、就職先の業種（学生・卒業生）

	数学	地球科学	経済学
製造業	1	0	3
卸売業	0	0	0
金融・保険業	0	0	4
不動産業	0	0	0
学術研究	3	4	6
専門・技術サービス業	3	2	2
教育学習支援業	6	0	1
医療・福祉業	1	0	0
サービス業	0	1	1
公務	4	3	0
その他	3	2	1
	21	12	18

職務内容

職務内容	学生	卒業生
専門的技術的職業（研究）	12	2
専門的技術的職業（技術開発）	2	5
専門的技術的職業（製造技術）	1	2
専門的技術的職業（教育）	4	8
専門的技術的職業（保健医療従事）	0	0
専門的技術的職業（その他）	1	2
管理的職業	3	1
事務	4	2
販売	1	0
サービス	2	2
その他	0	6
合計	30	30

職務内容（学生・卒業生）

職務内容	数学	地球科学	経済学
専門的技術的職業（研究）	3	4	7
専門的技術的職業（技術開発）	3	3	1
専門的技術的職業（製造技術）	1	1	1
専門的技術的職業（教育）	9	1	2
専門的技術的職業（保健医療従事）	0	0	0
専門的技術的職業（その他）	0	2	1
管理的職業	0	0	4
事務	1	1	4
販売	0	0	1
サービス	2	1	1
その他	3	1	2

専門と職との関係

	学生	卒業生	企業人
深く関係する	10	8	34
ある程度関係する	7	12	104
どちらとも言えない	2	0	42
あまり関係しない	3	5	72
全く関係しない	0	3	29
わからない	0	1	1
合計	22	29	282

専門と職との関係（学生・卒業生・企業人）

専門と職との関係	数学	地球科学	経済学
深く関係する	8	5	11
ある程度関係する	8	6	40
どちらとも言えない	1	0	17
あまり関係しない	4	3	19
全く関係しない	1	1	12
わからない	1	0	1
合計	23	15	100

【教育】

専門教育の理解

専門教育の理解	学生	卒業生
きわめて深まった	10	11
ある程度深まった	12	14
どちらとも言えない	0	1
あまり深まらなかった	0	2
全く深まらなかった	0	1
合計	22	29

専門教育の理解（学生・卒業生）

専門教育の理解	数学	地球科学	経済学	合計
きわめて深まった	11	5	5	21
ある程度深まった	8	6	12	26
どちらとも言えない	1	0	0	1
あまり深まらなかった	0	1	1	2
全く深まらなかった	1	0	0	1
合計	21	12	18	51

専門教育の満足度

専門教育の満足度	学生	卒業生
とても満足	5	7
ほぼ満足	10	17
どちらとも言えない	4	4
やや不満	2	1
とても不満	1	0
合計	22	29

専門教育の満足度（学生・卒業生）

専門教育の満足度	数学	地球科学	経済学	合計
とても満足	7	2	3	12
ほぼ満足	10	8	9	27
どちらとも言えない	3	1	4	8
やや不満	1	1	1	3
とても不満	0	0	1	1
合計	21	12	18	51

(3) 企業人関連

職位

職位	人数
一般社員相当	84
係長・主任相当	47
課長代理相当	31
課長相当	61
部長相当	41
本部長相当	8
役員相当	7
その他	1
合計	280

職務内容

職務内容	物理学	化学	数学	地球科学	機械工学	土木工学	経済学	ビジネス	歴史学	教育学	心理学
専門的技術的職業（研究）	0	7	0	0	2	0	0	0	0	0	0
専門的技術的職業（技術開発）	3	5	1	0	6	0	1	1	0	0	1
専門的技術的職業（製造技術）	1	5	0	0	6	2	1	0	0	1	0
専門的技術的職業（教育）	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0
専門的技術的職業（保健医療従事）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
専門的技術的職業（その他）	0	0	0	1	1	1	2	3	1	0	0
管理的職業	1	4	0	1	6	0	37	37	4	4	4
事務	0	0	0	2	1	0	14	20	3	7	5
販売	0	0	0	1	0	0	17	14	1	1	2
サービス	0	0	1	0	0	0	5	2	0	0	1
その他	3	4	0	0	0	0	6	4	1	1	1

仕事内容と専門分野の一致する新入社員割合

仕事内容と専門分野の一致する新入社員割合	人数
8割以上	14
6割以上8割未満	26
4割以上6割未満	63
2割以上4割未満	71
2割未満	105
合計	279

企業における汎用性の高い能力・技能の向上機会

汎用性の高い能力・技能の向上機会	人数
とてもある	118
ややある	125
どちらとも言えない	27
あまりない	11
全くない	2
合計	283

企業における専門性の高い能力・技能の向上機会

専門性の高い能力・技能の向上機会	人数
とてもある	97
ややある	119
どちらとも言えない	41
あまりない	24
全くない	1
合計	282

(4) コンピテンス認識

入学時、採用時に重視したことの第3位までの順位づけ

内容	対象	1位	2位	3位
教育内容	学生	5	7	5
	卒業生	4	10	4
	企業人	18	66	60
研究内容	学生	2	6	4
	卒業生	12	5	1
	企業人	24	72	47
特色ある学修プログラム	学生	1	1	3
	卒業生	0	0	1
	企業人	8	27	43
卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力	学生	0	2	4
	卒業生	2	3	4
	企業人	189	47	15
卒業生・修了生の進路や就職先	学生	0	1	0
	卒業生	2	2	7
	企業人	2	4	11
卒業生・修了生のネットワーク	学生	0	2	1
	卒業生	1	1	2
	企業人	2	14	21
大学の難易度や知名度	学生	10	2	3
	卒業生	7	6	4
	企業人	24	29	49
世界的な大学・大学院のランキング	学生	0	1	0
	卒業生	0	0	0
	企業人	3	4	3
その他	学生	4	0	2
	卒業生	1	2	1
	企業人	10	6	9

入学時の期待が満たされた程度

入学時の期待項目	対象	8割以上	6割以上8割未満	4割以上6割未満	2割以上4割未満	2割未満
教育内容	学生	9	4	3	1	0
	卒業生	8	5	3	1	1
研究内容	学生	7	2	2	0	1
	卒業生	8	7	0	3	0
特色ある学修プログラム（留学支援、インターン支援など）	学生	3	1	1		
	卒業生	1	0	0		
卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力	学生	3	2	1		0
	卒業生	3	4	1		1
卒業生・修了生の進路や就職先	学生	1	0	0		0
	卒業生	4	4	2		1
卒業生・修了生のネットワーク	学生	1	1	0	1	0
	卒業生	1	1	1	0	1
大学の難易度や知名度	学生	6	7	2		
	卒業生	7	8	2		
世界的な大学・大学院のランキング	学生		1			
	卒業生					
その他	学生	5		1		
	卒業生	4		0		

入学時の期待が満たされた程度（学生・卒業生）

内容	割合	数学	地球科学	経済学	合計
教育内容	8割以上	7	5	5	17
	6割以上8割未満	4	2	3	9
	4割以上6割未満	2	0	4	6
	2割以上4割未満	1	0	1	2
	2割未満	0	0	1	1
	合計	14	7	14	35
研究内容	8割以上	4	6	5	15
	6割以上8割未満	5	1	3	9
	4割以上6割未満	2	0	0	2
	2割以上4割未満	0	1	2	3
	2割未満	0	1	0	1
	合計	11	9	10	30
特色ある学修プログラム（留学支援、インターン支援など）	8割以上	1	1	2	4
	6割以上8割未満	0	0	1	1
	4割以上6割未満	1	0	0	1
	2割以上4割未満				
	2割未満				
	合計	2	1	3	6
卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力	8割以上	2	2	2	6
	6割以上8割未満	2	2	2	6
	4割以上6割未満	2	0	0	2
	2割以上4割未満				
	2割未満	0	0	1	1
	合計	6	4	5	15
卒業生・修了生の進路や就職先	8割以上	1	2	2	5
	6割以上8割未満	3	0	1	4
	4割以上6割未満	1	0	1	2
	2割以上4割未満				
	2割未満	1	0	0	1
	合計	6	2	4	12
卒業生・修了生のネットワーク	8割以上	0	0	2	2
	6割以上8割未満	0	2	0	2
	4割以上6割未満	0	1	0	1
	2割以上4割未満	0	0	1	1
	2割未満	1	0	0	1
	合計	1	3	3	7
大学の難易度や知名度	8割以上	5	2	6	13
	6割以上8割未満	7	2	6	15
	4割以上6割未満	2	0	2	4
	2割以上4割未満				
	2割未満				
	合計	14	4	14	32
世界的な大学・大学院のランキング	8割以上				
	6割以上8割未満	1			1
	4割以上6割未満				
	2割以上4割未満				
	2割未満				
	合計	1			1
その他	8割以上	4	4	1	9
	6割以上8割未満				
	4割以上6割未満	1	0	0	1
	2割以上4割未満				
	2割未満				
	合計	5	4	1	10

卒業生が職務に役立っていると思う項目

卒業生が職務に役立っていると思う項目	1 位	2 位	3 位
教育内容	9	4	4
研究内容	7	6	1
特色ある学修プログラム		1	1
卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力	7	4	5
卒業生・修了生の進路や就職先		2	1
卒業生・修了生のネットワーク		5	2
大学の難易度や知名度	2	1	5
世界的な大学・大学院のランキング			
その他	3		

卒業時に身に付けたいことを第3位まで順位づけ

卒業時に身に付けたいこと	対象	1 位	2 位	3 位
文系・理系の区別なく幅広い知識を持っていること	学生	5	0	5
	卒業生	2	4	4
	教員	2	2	3
	企業	13	12	32
文化や芸術などの素養を身に付けていること	学生	1	2	3
	卒業生	0	0	0
	教員	0	2	0
	企業	1	1	3
深い専門的知識を持っていること	学生	8	4	3
	卒業生	5	2	2
	教員	2	4	6
	企業	8	2	15
物事の本質を考え抜く思考力を持っていること	学生	7	7	4
	卒業生	13	2	5
	教員	14	4	5
	企業	175	60	28
多様な考え方やアプローチを理解すること	学生	0	8	3
	卒業生	2	8	7
	教員	2	8	4
	企業	37	115	88
的確な判断力と実行力を身に付けていること	学生	0	1	4
	卒業生	3	8	5
	教員	4	4	6
	企業	43	92	104
その他	学生	1	0	0
	卒業生	2	0	1
	教員	0	0	0
	企業	6	0	9

職務に役立っていると思う内容（卒業生）

内容	順位	経済学	数学	地球科学	合計
教育内容	1 位	1	7	1	9
	2 位	0	2	2	4
	3 位	1	2	1	4
合計		2	11	4	17
研究内容	1 位	1	2	4	7
	2 位	0	6	0	6
	3 位	0	1	0	1
合計		1	9	4	14
特色ある学修プログラム（留学支援、インターン支援など）	1 位	0	0	0	0
	2 位	1	0	0	1
	3 位	0	1	0	1
合計		1	1		2
卒業時に身に付けるべき知識や資質・能力	1 位	2	4	1	7
	2 位	1	2	1	4
	3 位	1	1	3	5
合計		4	7	5	16
卒業生・修了生の進路や就職先	1 位	0	0	0	0
	2 位	0	1	1	2
	3 位	1	0	0	1
合計		1	1	1	3
卒業生・修了生のネットワーク	1 位	0	0	0	0
	2 位	3	1	1	5
	3 位	0	1	1	2
合計		3	2	2	7
大学の難易度や知名度	1 位	1	0	1	2
	2 位	0	1	0	1
	3 位	1	4	0	5
合計		2	5	1	8
その他	1 位	1	2	0	3
	2 位	0	0	0	0
	3 位	0	0	0	0
合計		1	2	0	3

5.3 参考資料 3 質問紙、分野・大学別図録（別ファイルを参照のこと）